様式Ｃ-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年 6 月 10 日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）
研究期間：2007～2008
課題番号：１９８２００５５
研究課題名（和文）近世日本における輸入・国産織物の競合と共存：オランダ史料に見る工業化の歴史的前提
研究課題名（英文）The long-term trends in foreign trade and the domestic market expansion in pre-industrial Japan, ca. 1650-1850

研究代表者
藤田　加代子（FUJITA Kayoko）
立命館アジア太平洋大学・アジア太平洋学部・准教授
研究者番号：９０４５４９８３

研究成果の概要：

17 世紀半ば～19 世紀半ばまでのオランダによる長崎からの主要輸出入品の英文データベースを作成し、主要商品である金属の輸出（貨幣鋳造材料の銀および銅・金）と繊維製品の輸入（生糸・各種織物）の長期的なトレンドを分析した。そして最終的に繊維産業を中心とした近代日本の工業化成功の歴史的基盤の解明につなげるべく、近世のグローバルな経済ネットワークの中の日本貿易の位置づけと、海外貿易が国内社会経済に与えた影響とを検討した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	1,320,000	0	1,320,000
2008 年度	1,080,000	324,000	1,404,000
年度			
年度			
年度			
総　計	2,400,000	324,000	2,724,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・史学一般
キーワード：オランダ東インド会社、イギリス東インド会社、唐船、銀、繊維製品、海産物、大坂市場、商品連鎖

１．研究開始当初の背景

近年のグローバル・ヒストリー研究、とりわけグローバル経済史の分野においては、日本・中国を含む東北アジアと世界で最初に工業化を成功させた西北ヨーロッパについて、農業の商業化・市場構造・経済成長・生活水準などの要素が比較され、それぞれの工業化を準備した歴史的な条件の差異について活発な議論が交わされている（例えば Kenneth Pomeranz, *The Great Divergence: China,*

Europe, and the Making of the Modern World Economy. 2000; Kaoru Sugihara, “The state and the industrious revolution in Tokugawa Japan”. Working Papers of the Global Economic History Network (GEHN), 02/04. 2004）。

一方、荒野泰典（『近世日本と東アジア』、1988年）らを先駆とする一連の日本近世対外関係史研究は、徳川政権の「鎖国」政策は同時期の明・清や朝鮮王朝と同じ「海禁」政策の一種であること、閉鎖的と考えられてきた江戸時代の社会・経済が長崎における唐船やオランダ東インド会社（VOC）の取引や対馬・薩摩・松前を通じた外交・貿易によって海外と結びついていたことを明らかにしてきた。また新しい歴史学の研究領域として成長しつつある海域アジア史は、近代世界システム論やアジア交易圏論などの成果を参照しつつ、近代以前のアジアで発展したネットワークの実態や海洋交易が陸の国家に与えた影響を、国家の枠を意識的に超えて議論してきた（その最新の成果として、桃木至朗編『海域アジア史研究入門』2008年）。

しかし、ここ20年ほどの間に19世紀以降のアジア域内／対ヨーロッパ／環太平洋貿易の実態とその日本経済への影響については研究が飛躍的に深化したのに比べ、18世紀以前の対外貿易と経済・社会の関係については分析が立ち遅れている。例えばオランダ語史料を用いた徳川日本の貿易に関する研究について見れば、永積洋子（『唐船輸出入品数量一覧 1637～1833年』1987年）・石田千尋（『日蘭貿易の史的研究』2004年）ら対外関係史研究者によって対中国・オランダともに多くの貿易品目について取引量・価格などが明らかにされてきた。しかしその貿易が総体として、国内の社会・経済やグローバルな世界そのものにどう影響したか、いかに近代への移行を準備したのかという点は、上述の新しい基礎的なデータを用いて再検討が必要な時期に来ている。

２．研究の目的

本研究は、19世紀後半以降の繊維産業を中心とした日本の工業化成功の歴史的基盤を明らかにし、西北ヨーロッパ（イングランドなど）と東北アジア（中国、朝鮮、日本）の比較を軸に進められているグローバル経済史研究のなかに、工業化以前の日本をより正確に位置づけることを最終的な目的とした。先行研究によれば、17世紀初期には日本の対外交易（主として銀輸出）は米価換算では全国農業産出高の10%程度を占め、18世紀中にその割合が徐々に低下して閉鎖的な（いわゆる『鎖国』的な）経済の循環構造が出現したとされている（新保博・長谷川彰「商品生産・流通のダイナミックス」、速水融・宮本又郎編『日本経済史1 経済社会の成立 17-18世紀』1988年所収）。オランダ東インド会社員らは、対外関係が非常に限定されていた江戸時代を通じて、日本で取引を行うとともに、国内の経済状況を観察し、それを東・東南アジア海域からヨーロッパまでを含む当時のグローバルなネットワークの中に位置づけて分析することを続けた。したがって、彼らの記録を和文史料と比較対照することによって、二世紀にわたる閉鎖的な経済社会構造の形成過程を再現するとともに、経済的連関が強化されつつある近世後期の世界に徳川日本をいかに位置づければいいのか、という比較史的な議論の深化に貢献することが可能になるのである。

３．研究の方法

本研究では、これまでの申請者の研究をふま

え、次のテーマと作業内容を設定した。
(1)1641 年（オランダ東インド会社長崎商館の設立）から日本市場が西洋列強に対して開放される 1850 年代までの期間、オランダ東インド会社および唐船によって長崎で取引された主要輸出入品（輸出：金属〔主として貨幣鋳造材料の銀および銅・金〕、海産物；輸入：生糸・織物〔絹・綿・麻・毛および混紡製品〕等の繊維製品、その他の主要輸入品〔砂糖、蘇木〕）の生産地・価格・取引量・品質・販売先のデータベースを、未刊行史料調査と先行研究の整理を通じて作成。
(2) 前項で得られた貿易データを土台に、アジアでの取引に不可欠の銀の源のひとつであり、繊維製品の消費地でもあった徳川日本を、オランダ東インド会社がヨーロッパから極東までをつなぐネットワークの中にどう位置づけようとしていたのかを検討する。とくに、18 世紀後期／19 世紀のグローバルな商品連鎖の例として、イングランド産織物の生産・流通・消費とそれに付随する情報の流れに着目する。また、長崎での競争相手であった唐船の商業活動を会社がどのように理解し、対抗しようとしていたかを分析する。
(3) 商館長日誌や商館長からバタヴィア・アムステルダムへの報告書類を通じて、オランダ東インド会社が日本の市況を長期にわたってどのように分析し、需要に対応しようとしていたかを調べる。とりわけ、商館のある長崎だけでなく、当時の中央市場であった大坂市場での国産・輸入繊維製品の競合・共存関係を会社がどう理解していたのかを検証する。

一次史料のうち日本に複製がない東インド会社史料、特に日本産金銀銅と南アジア産繊維製品の取引の中心であった在インド商館群関係の文書については、海外の所蔵館で調査をおこなった。具体的には、オランダ国立中央文書館（ハーグ）、ライデン大学付属図書館・王立言語地理民族学研究所（ライデン）に所蔵されるオランダ東インド会社史料と、大英図書館（ロンドン）所蔵のイギリス東インド会社（EIC）史料ならびにヴィクトリア・アンド・アルバート博物館のテキスタイル・コレクションと銀製品コレクションを利用し、同時にこれら機関の専門家から助言をいただいた。また国内においては、大阪大学付属図書館（特に同館所蔵の日本紡績協会寄贈資料）、国立民族学博物館、大阪府立中之島図書館で近世の織物生産と大坂市場を中心とした流通に関する一次・二次資料を、九州大学記録資料館九州文化史資料部門、長崎歴史文化博物館で輸入織物サンプルを、それぞれ調査した。

４．研究成果

一年半の助成期間を終えて、国内外のグローバル経済史および文化交流史への将来的な貢献につながる複数の知見を得ることができた。
(1) 17 世紀～18 世紀末までのオランダ東インド会社長崎商館の主要輸出入品に関して、会社の会計帳簿を基にした価格・取引量・品質・販売先のデータベース化の作業をほぼ完了した。今後は、19 世紀半ばまでのデータを加え、見直しと修正作業をおこない、英訳を進めていく予定である。最終的には、英語で解題を執筆し、公開データベースとして公開して、国際的に成果を共有したいと考えている。インターネット上での公開とするか、従来型の出版とするかは、今後内外の専門家の意見をあおぎたい。
(2) オランダ東インド会社のアジア間交易について：①会社は 17 世紀第二四半期には輸出入ともインド（ベンガル、コロマンデル、

スラットなどの商館群）を主たる取引先とし、16 世紀以来の日本の海外貿易のパターン（日本銀輸出―中国産生糸・織物輸入）を大きく変化させた。これ以降、徳川日本の経済は、唐船を通じて東アジア経済圏と、オランダ船を通じてインド洋経済圏と恒常的な関係を持つことになった。ただし貿易量・額とも、17 世紀第 2 四半期に銀輸出が、第 3 四半期には生糸（ベンガル産）輸入が早くもピークを迎えた。代わって南アジア産織物が輸入品の首位を占めた。18 世紀には海外貿易の漸進的な減少と、南アジアからヨーロッパへの輸入繊維製品の産地のシフトが見られた。②国内外での調査によって、19 世紀にイングランドで生産された織物が日本の消費者の手に到達するまでの過程をイギリス・オランダ・日本の史資料から復元し、商品連鎖分析を行うことが可能であることが判明した。これについては、2009 年度から研究代表者として新たな助成をいただくことになり（基盤研究 B「帝国・システム・海域ネットワーク：１９世紀以前のアジアにおける広域地域史の再構築」）、今後 3 年間の国内外の研究者との共同作業を通じて深化させる予定である。

(3) 日本の国内市場と海外貿易について：① 17 世紀後半には織物類が会社の輸入貿易の首位を占めたとはいえ、国産品と比較した場合、1714 年の大坂への移入品で国産綿織物（価額）が白木綿・縞木綿だけでも 13.9%を占めるのに対し、輸入品は総計で 4.1%である。しかし南インド産の縞柄織物に影響を受けた国産縞木綿が大流行したことに明らかなように、18 世紀には消費社会の拡大を受け、輸入品の影響を受けつつ日本人好みの意匠を備えた国産品が生産された。オランダ東インド会社の日誌や報告書類からは、会社が長崎や大坂・江戸でのあらゆる機会を通じて日本市場の動向に関する情報を収集し、日本の消費者向けの商品調達を海外で試みたことがわかる。すなわち、徳川日本の服飾文化は同時期のヨーロッパ・アフリカ・東南アジアと同様に、インド文化の影響というグローバルなトレンドの中にあり、しかもそこで芽生えた消費者の嗜好は、明治の工業化後にまでつながる。したがって海外交易の経済的なインパクトを分析する場合、文化史・美術史的な視点を組みこむ必要があるといえる。この点については、助成期間中に国外のグローバル経済史・文化史の若手研究者との研究ネットワークを形成できたため、第 15 回国際経済史協会大会（ユトレヒト、オランダ、2009 年 8 月）で銀の輸出・国内での貨幣鋳造・非貨幣としての利用の関連をめぐる報告と、その後の出版を予定している(Session "Global Commodities: The Material Culture of Early Modern Connections" organised by Giorgio Riello and Anne Gerritsen)。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）
〔雑誌論文〕（計１件）

① Fujita, Kayoko. 2008. "The European Maritime Empires and Asian Commodity Flows: British and Dutch Trade Strategies in 17th- and 18th-Century East Asia from a Comparative Perspective". *Proceedings of the Third Japanese-Korean Conference of British History: Region, Interchange and Culture in History*. Japanese-Korean Forum for the Study of British History, et.al., 77-93. 査読無（依頼原稿）.

〔学会発表〕（計２件）

①Fujita, Kayoko. "The Material Culture of Imported Textiles in Tokugawa Japan and Choson Korea". Global Exchange and Innovation of Visual and Material Culture Across the World, 1300 –1800. Venice Centre of Warwick University Venice, Italy, 29 March 2009.

②Fujita, Kayoko. "The European Maritime Empires and Asian Commodity Flows: British and Dutch Trade Strategies in 17th - and 18th -Century East Asia from a Comparative Perspective". The Third Japanese -Korean Conference of British History "Region, Interchange and Culture in History". Japanese -Korean Forum for the Study of British History, et.al. Chonnam National University, Gwangju, South Korea, 13 November 2008.

〔図書〕（計１件）

① Fujita, Kayoko. 2009. Japan Indianised: The Material Culture of Imported Textiles in Japan, 1550 -1850. In *The Spinning World: A Global History of Cotton Textiles, 1200 -1850*. Pasold Studies in Textile History, ed. Giorgio Riello and Prasannan Parthasarathi, 181 -203. Oxford University Press/Pasold Research Fund.

〔その他〕
なし

６．研究組織
(1)研究代表者
藤田　加代子（FUJITA　Kayoko）
立命館アジア太平洋大学・
アジア太平洋学部・准教授
研究者番号：９０４５４９８３

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし